

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

「今が旬」の人や馬に焦点を当ててお届けしているこのコラムだが、今月は、今まさに北米の競馬界で話題が沸騰している馬を紹介したい。たった1度のパフォーマンスで、「ユースター誕生か?」、「エーススター出現か?」と、おおいに持て囃されているアロゲイト(牡3、父マンブライドルズソング)が、その馬である。

たった1度のパフォーマンスとは、8月27日にユタ州のサラトガ競馬場で行われた「真夏のダービー」G1トラヴァーズS(d10F)で同馬が見せたもので、確かにそれは激烈なインパクトを持っていた。1番枠から好スタートを切ったアロゲイトは、1コーナーに入った辺りで先頭に立つて馬群をリード。前哨戦のG2ジムダンディS(d9F)を逃げ切っての参戦だったオバパン(牡3、父アンクルモー)や、前走G1ハスケル招待(d9F)が逃げて2着だったアメリカンフリーダム(牡3、父ブルピット)の2頭が、差のない2番手を追走する形となり、半マイル=46秒8、6F=1分10秒85というハイラップが刻まれることになった。それにも関わらず、3コーナーから後続を引き離しにかかるといふ、規格外のレースをしたのがアロゲイトで、直線入り口で既に3馬身あつた2番手以下との差が、直線に入ると見る間に広がり、最後まで全く脚色が衰えなか

つたアロゲイトがゴールに飛び込んだ時には、2着アメリカンフリーダムとの差は13・1/2馬身にまで広がっていた。

そして、観客が更に驚いたのが、電光掲示板に表示された勝ち時計だった。サラトガ競馬場のダート10F戦では初めて2分の壁を破る1分59秒36をマークし、1979年のトラヴァーズSでゼネラルアッセンブリーが記録した2分00秒0を37年ぶりに更新する、驚異のトラックレコードが樹立されたのである。

しかも、アロゲイトはこのレースが重賞初挑戦だったものだから、彗星のように現れた超大物と、メディアもファンも大騒ぎをすることになったのである。

アロゲイトは、カリッド・アブドウーラ殿以下の競馬組織ジャドモント・ファームズの所有馬だ。09年11月にボビー・フランケルが亡くなつて以降、しばらく空席となつていたジャドモントの北米西海岸における主戦調教師に指名されたボブ・バファートが、14年のキーンランド9月セールに上場されていたこの馬の購買を推奨。G3ウイジヤボードH(芝8F)3着馬バブラーの初仔で、3代母がBCジュヴェナイルフィリーズ(d8・5F)など6つのG1を制したチャンピオン牝馬のメドウスターという血統背景を持つ同馬は、56万ドルで購入され、ジヤドモントの所有馬となつた。

バファート厩舎からデビューを果たしたのが今年4月で、初戦となつたロスマラミトスのメイドン(d6F)は3着に敗れたが、2戦目となつたサンタアニタのメイドン(d8・5F)を4・1/2馬身差で制して初勝利。続くサンタアニタの条件戦(d8・5F)を5・1/4馬身差で連勝すると、前走デルマーの条件戦(d8・5F)を1・3/4馬身差で制して臨んだのが、G1トラヴァーズSだつた。

春のG1プリーケネスS(d9・5F)勝ち馬で、前走G1ハスケル招待で自身3度目のG1制覇を果たしての参戦だったイグザジェレーター(牡3、父カーリン)、G1ベルモントS(d12F)2着馬デステイシン(牡3、父ジャイアンツコウズウェイ)など、この世代の鋒々たる顔触れが出走していた中、アロゲイトがオッズ12・7倍の8番人気に過ぎなかつたのも、無理からぬことだつた。

バファート師はレース後、アロゲイトの次走は、この路線の総決算となる11月5日のG1BCクラシック(d10F、サンタアニタ)と宣言。「最強古馬カリフオルニア」と超新星アロゲイトの顔合わせは、今年のアメリカ競馬を締めくくるに相応しい、頂上決戦となりそうであるに相応しい、頂上決戦となりそうである。